はしたない姉妹ですが、躾けてもらえますか？

獣魔導士は服従の首輪にて姉妹と契る

ツカサ

ファンタジア文庫

2870

005 序　章
014 第一章 —— セプテントリオンの獣魔導士
054 第二章 —— ポラリスの新入生
119 第三章 —— 魔壊のヴァナルガンド
206 第四章 —— クロウ・クルワッハ
270 終　章
278 あとがき

Could you train vulgar sister?

CONTENTS

はしたない姉妹ですが、躾けてもらえますか？

口絵・本文イラスト　小山内

序章

俺は――最低の人間だ。

何よりも、誰よりも大切な二人を……彼女たちの尊厳を、俺は蹂躙しようとしているのだから。

薄暗い室内に漂うのは、微かな血の匂いと甘い体臭。

部屋の床に描かれた七層の多重魔法円――その塗料には俺と彼女たちの血を混ぜてある。

そして魔法円の中心で、銀の腕輪を嵌めた二人の少女が契約の交わされる時を待っていた。

幼い日の情景が脳裏を過ぎる。

『――クロくん、大丈夫？』

一つ年上の彼女――遊奈は、いつも優しかった。どんな我がままを言っても、仕方ないなぁという顔でお願いを聞いてくれた。

俺が何かに迷った時は、何も言わず笑顔で手を引いてくれた姉のような少女。
よく裾の長い、清楚な雰囲気のワンピースを着ていた遊奈は今、一糸纏わぬ姿となり、その大きな胸を辛うじて腕で隠している。
いや――一糸纏わぬという表現は誤りかもしれない。何故なら彼女たちの〝尻尾〟は、〝獣毛〟で覆われているのだから。
遊奈の付加部位である〝狼の耳とフサフサな長い尾〟が緊張で微かに震えていた。
変わり果てた遊奈の姿から視線を逸らし、その隣を見る。
また頭の中に懐かしい声が蘇った。
『兄様、遅いわよ！』
一つ年下の彼女――利亜は、いつも元気で強気だった。とても負けず嫌いで、些細なことでも俺と張り合い、負けると大きな声で泣く。
けれど血の繋がっていない俺を兄と呼び、どんな時でも傍にいようとしてくれた、本当の妹みたいな少女。
昔はフリルのついた可愛い服を好んでいた小柄な利亜も、魔法円の中で華奢な裸身を晒している。
彼女の付加部位は山羊を連想させる捻じれた角と短めの尻尾。

恥ずかしそうに顔を伏せている遊奈とは正反対に、利亜は薄い胸を手で隠しながら、涙目でこちらを睨みつけていた。
――ごめん。
本当は口に出して謝りたかったが、胸の内で呟くに留める。
俺には言い訳をする資格なんてない。
認めてくれなくていい。許してくれなくていい。
遊奈と利亜、俺はこの〝姉妹〟と本当の家族になりたかった。いつかはそうなれると、幼い日には信じていた。
でも、その夢はもう叶わない。俺自身の手で――淡い夢想を焼き捨てる。
「ねえ、クロくん。私たちはずっと人間で在ろうとしてきたけれど……それでもどうしようもなく〝はしたない獣〟なの。ちゃんと躾けてくれないと……本当にいつか後悔するかもしれないわ。契約するのなら、それだけは覚えておいてね？」
儀式の直前、遊奈が告げた言葉を思い出す。
分かっている。後悔なんてしない――絶対に！

「グリモワール・リング、起動。外部回路――昏部式魔法円とリンク、機能拡張」
右手を掲げて告げると、人差し指と中指に嵌めた二つの指輪が輝き始めた。
それと呼応するかのように、魔法円も光を放つ。
二人の少女はびくりと体を竦め、怯えた表情で視線を巡らせた。
「第二階位の権限において、今ここに契約を結ぶ――」
俺は規定のスペルを唱え、儀式を実行に移す。
ホントに欲しかったものは、こんな契約なんかじゃない。魔導の力で無理やり結ぶような絆ではない。
けれど欲しくはなくとも、これは必要なもの。
遊奈と利亜が共に生きて行くために、彼女たちがいつか幸せを手にするために――。
そのためなら、俺の夢なんて叶わなくていい。
「柊、遊奈、柊利亜、汝らは我が獣となるか」
重々しく問いかけると、姉妹は俺に目を向けた。
二人とも顔は羞恥で上気し、肌は汗で湿っている。その瞳に浮かぶ感情は、対照的。
遊奈はどこか悲しそうな、揺れる瞳で俺を見ている。
利亜は怒ったような、悔しそうな瞳で俺を睨んでいる。

だがそれでも、二人の答えは同じだった。

「――はい」

姉妹の声が重なり、指輪と魔法円がさらに眩い光を放つ。

「んっ……ああっ!?」

「やっ――!?」

光の中で嬌声が響く。

パンッと二人の腕輪が砕け散り、光の粒子となって彼女たちの首元へ集束する。

そして一際眩い輝きが溢れ、弾けて消えた。

「あ……」

遊奈と利亜は恐る恐る首に手をやる。そこにあるのは俺と彼女たちの契約の証――俺の指輪と対になる銀色の首輪。さらに俺が追加した昏部の術式によって、二人の下腹部には俺の魔術記号が痣のように浮かび上がっている。

契約は成された。

これでもう彼女たちは、俺の幼馴染でも、家族でもない。人ですらない。

二人は俺――昏部玖郎に使役される〝幻獣〟だ。

はしたない姉妹ですが、

俺は――最低の人間だ。

あたしたちは――[redacted]だ。

1

躾けてもらえますか？

第一章　セプテントリオンの獣魔導士（ソーサラー）

1

僕を乗せた車が、大きな屋敷（やしき）の前で止まる。
後部座席のドアが開くと、けたたましい蟬（せみ）の音が飛びこんできた。
「今日からここが、あなたのお家よ」
先に降りた親戚（しんせき）のおばさんが、僕を促（うなが）す。
少し躊躇（ためら）いながら車から降り、ぐるりと辺りを見回した。
そこは高い丘（おか）の上。塀（へい）に囲われたお屋敷の他に建物はない。ガードレールの向こうにはとても小さくなった街並みと、その先に広がる海が見える。
キィィィィィ……。
金属が軋（きし）む音を聞いて振（ふ）り向くと、屋敷正面の門が自動で開こうとしていた。
タッタッタッタ――！

軽（かろ）やかな足音を響かせて、まだ開き切っていない門の隙間（すきま）から一人の女の子が飛び出してくる。
「お母様！　この子なの？」
僕より少し年下に見える女の子は、俺を指差して親戚のおばさんに問いかけた。
「ええ、そうよ」
おばさんはにこりと微笑（ほほえ）み、首を縦に振る。
「ふうん……へー……」
女の子は大きな瞳をキラキラさせて、至近距離（きょり）から僕を眺（なが）める。
「はじめまして！　あたしは利亜（りあ）！　ねえ、あなたいくつ？」
「……九歳」
遠慮（えんりょ）のない彼女――利亜の視線に気圧（けお）されながら、僕は短く答えた。
「じゃあ、あたしより一つ上なのね。うーん……ちょっと頼（たよ）りなさそうだけど、これから家族になるのなら仕方ないか……特別に〝兄様〟って呼んであげるわ！」
「に、兄様？」
思いがけない言葉に驚（おどろ）き、僕は聞き返す。
〝あの出来事〟からずっと、何も感じなくなっていたのに……僕の内側がかすかに揺らい

でいた。
「そ。だからちゃんと兄様らしく振る舞ってよね！　妹のことはどんなことがあっても守る！　どんなワガママでも聞く！　それが立派な兄様なんだから！」
正面から僕を指差し、堂々と宣言する利亜。
「えぇー……」
とんでもない要求に僕が顔を顰めていると、開き切った門を抜けてもう一人の女の子が現れる。
「利亜、いきなりそんな無茶を言っちゃダメよ。玖郎くんはとても辛いことがあったばかりなんだから」
ちょっとだけ僕より年上に見える彼女は、利亜を窘めて僕の前に立った。
「はじめまして、私は遊奈。今日から、私があなたのお姉ちゃんよ」
そう言うと、彼女――遊奈はいきなり僕を胸元に抱き寄せた。
ふわりと甘い香りに包まれ、鼻先が微かな柔らかさを感じる。
「な……」
状況が全く分からずに硬直していると、遊奈は僕の頭を優しく撫でた。
「大変だったわね。お父様とお母様がいきなりいなくなるなんて……私には想像もできな

い。でも……でもね、これからは私たちが一緒にいるから。玖郎くん……ううん、クロくんって呼ぶね。その方が、何だか〝私の弟〟って感じがするもの」
そのままぎゅっと強く抱きしめられる。
苦しいけど、暑いけど、何だかとても心地が良かった。
「っ……」
揺れる。
僕の内側で、また何かが――。
目の奥がぐっと熱くなる。抑えつけていたものが、一気に溢れ出す。
「う……ぐうっ……うわぁぁぁぁぁぁぁぁん!!」
父さんと母さんが〝獣〟に喰われてから一週間。
あの時に涙を流せなかった僕は、今になって大声で泣き喚いた。

また夏がやってきた。
『――最初の幻獣災害発生から今日で二十五年。現在も立ち入り禁止になっているスカイタワー跡地には、慰霊のため多くの人々が――』

屋敷のリビングでぼうっとテレビを眺めていた僕は、特別番組が始まったのを見てチャンネルを変える。

『――幻性変異症候群、通称〝幻変症〟の早期発見技術は格段に進歩し、三級以上の幻獣災害が発生することはほぼなくなりました。今後は発症前に因子保持者を発見、隔離することも可能に――』

ボタンを押し、また別のチャンネルに。

『――セプテントリオンとして再出発した我が国は、凄まじい速度で復興と発展を遂げ、魔導技術先進国となりました。しかし魔導士への富と権力の集中を問題視する声も多く――』

諦めてテレビを消す。

毎年、この日はこんな番組ばかりだ。

幻獣関連の話題は、嫌なことを思い出すから好きじゃない。

腰かけていたソファの背もたれに体重を預け、高い天井を見上げる。

ここへ来たばかりの頃は、部屋の広さや高さに慣れなかった。一年経った今でも、時々落ち着かない気分になる。

「遊奈と利亜、どうしたんだろ……」

朝、調子が悪いと言って二人は部屋から出てこなかった。

おじさんは仕事で、おばさんはＰＴＡの集まりに行っている。昼にはいつものお手伝いさんが来てくれるはずだが、その前に様子を見に行った方がいいだろう。

僕はソファから立ち上がり、二人の部屋に向かおうとした。

けれどちょうどそのタイミングでリビングの扉が開く。

「あ、おはよ――」

挨拶しようとした声は半ばで途切れた。

二人、支え合うようにして現れた遊奈と利亜。

この一年で本当の家族のように親しくなった姉妹は、怯えるように、縋るように僕を見つめている。

僕も彼女たちから目を離せなかった。

利亜の頭部から、二本の捻じれた角が生えている。

遊奈のふわふわした髪の間から、狼のような耳が飛び出ている。

「兄様……」

「クロくん……」

変貌を遂げた二人は、体を震わせながら言葉を紡いだ。

「……助けて」

けれど彼女たちの声を聞いた時、驚きの感情はどこかへ消える。

「うん――分かった」

何ができるのかは分からない。

でも僕は、迷わずに首を縦に振った。

――たった半日。

僕が遊奈と利亜を守れたのは、それだけの時間だった。

「離せっ!!」

ポラリスの〝獣魔導士〟に連れて行かれる二人に、僕は必死で手を伸ばす。

けれど僕の体は何人もの大人に押さえ込まれていて、それ以上動くことはできない。

「いやっ！　助けて――助けてよ、兄様！」

利亜がもがきながら叫んでいた。

「クロくん……クロくんっ!!」

遊奈はこちらを振り向き、ただ僕の名前を呼んでいた。

なのに僕は何もできない。

どうやっても……今は、とどかない。

だから――。

「っ……いつか、いつか……助けに行く！　必ず……絶対に!!」

地面に顔を押しつけられながら、ありったけの声で叫ぶ。

喉の痛みも、口の中に入る砂の味も無視して、何よりも大切な二人に誓う。

この日、この瞬間、僕は自分の〝生き方〟を決めたのだ。

2

――――。

最初はうるさいと感じたプロペラの音は、いつしか気にならなくなっていた。

それは雨の日の、雑音に満ちた静寂のよう。

いや、ひょっとすると雨も降っているかもしれない。出発する直前、首都の空は灰色の雲に覆われていた。

けれど俺が乗せられた軍用ヘリの後部スペースには窓がなく、外の様子を確かめる術はない。

小隊規模の人員運搬を想定しているのか、後部スペースにはかなりの余裕がある。そこにいるのは、俺とあともう一人だけ。

向かい合うシートの対角線上に座る人物に、俺は視線を向けた。

たぶん年齢は俺とあまり変わらない――十五、六歳の少女だ。俺と同じく、支給されたばかりの黒い制服を身に付けている。髪の色素が薄く、肌も白い。やはり〝外来組〟だろうか。

すると俺の視線を感じたのか、少女がこちらに顔を向ける。

「……日本語、分かるか？」

俺は少し躊躇いながらも、彼女に話しかけてみた。俺を見る青い瞳が、何かを問うているように感じられたからだ。

「ええ、ポラリスでの公用語ですから」

流暢な日本語で彼女は答える。特に迷惑そうな表情は見せていない。たぶん彼女も退屈していたのだろう。

「俺は、昏部玖郎。君は？」

「――アリス・リライト。欧州で細々と続いてきた〝魔女〟の末裔です。クラベ……というのは聞いたことのない家名ですね」

アリスと名乗った少女は、俺の顔をまじまじと見つめた。

「ずっと山奥に潜んでいた血族だからな。それにしばらく後継者が決まらずにいた。そのせいで〝国内〟の一族なのに、魔導士登録がこんなに遅れたんだよ」

俺は苦笑を浮かべる。

――ただ、そのおかげで俺はチャンスを掴めた。

何より大切だった姉妹を失ってからの五年は、まさに地獄のような日々だったけれど、俺は自分に残っていたあらゆるものを犠牲にして、昏部の姓を手に入れたのだ。

「セプテントリオンが外部からの魔導士登用を始めて二十年……かなり出遅れてしまいましたね。ポラリス設立当初なら、国内の家系として優遇されたでしょうに。もう〝法魔導士〟は定員一杯。今となっては〝獣魔導士〟の枠しか空いておらず、まずはその候補生になるしかありません」

少し同情した口調でアリスは言う。

「別に旨みのあるポジションが欲しいわけじゃないから構わないさ」

しかし俺が軽く肩を竦めると、彼女は意外そうに瞬きをした。

「何か他に目的があると？」
「ああ」
強く頷く。
するとアリスは初めて口元に小さな笑みを浮かべた。
「――私と同じですね」
「君も？」
「ええ」
アリスは頷く。
それが何なのかは語らない。俺も、あえて口にしない。
ただ何となく彼女に親近感を覚え、俺は彼女に笑いかける。
「じゃあお互い頑張ろう」
「そうですね。頑張りましょう」
そうして俺たちは互いの目的を知らぬまま、笑みを交わしたのだった。

ヘリが着陸し、プロペラの音がゆっくりと途絶える。

すると異様なほどの静けさが辺りを包んだ。
少なくとも雨の音は聞こえない。というか環境音が全くしない。
その理由はアリスと共にヘリを降りたところで判明した。
「まさかもう、ポラリスの〝内側〟だったなんてな」
俺が呟くと、アリスは苦笑を浮かべる。
「これではここがどの辺りなのか、見当もつきませんね。首都からヘリで二時間の範囲というだけでは、特定など不可能です」
彼女はそう言って、ドーム状の空間を見渡した。
そこはヘリポート以外には何もない空間で、開閉式と思われる天井は閉じている。恐らくヘリが出入りする時だけ開くのだろう。
――ようやく、ここまで来た。
込み上げる想いを表情に出さないよう堪えていると、ドームの端にある扉が開いた。
正式な獣魔導士の証である白装を来た男女が、俺たちの前までやってくる。
「昏部候補生」
女性の方の獣魔導士に名前を呼ばれ、俺は背筋を伸ばす。
「はい」

「君はこちらへ」
そう言って女性は俺に背を向け、やってきた扉の方へ歩き出した。
それを見たアリスは俺に小さく会釈をする。
「ここからは別々みたいですね。〝外来〟の私は、きっとあなたより手続きが多いのでしょう。それではまた――〝入学式〟で」
「ああ、また」
俺は小さく手を振り、女性の後を早足で追いかけた。
ドームの扉を潜った先はエレベーターで、女性がパネルを操作すると籠は下降を始める。
籠の壁面は透明でシャフト内の武骨な内観が丸見えだったが――途中でいきなり視界が広がった。
シャフトの壁が透明な材質に変わり、外の景色が目に飛び込んできたのだ。
そこは広大なすり鉢状の空間。
中央部には水が溜まって湖のようになっており、周囲には森や川が見える。そしてさらにそれを取り囲むようにして、近代的な建造物が立ち並んでいた。
巨大な〝すり鉢〟の直径は恐らく数十キロ。
だが何より驚くべきなのは、このとてつもなく広い空間に〝天井〟があることだ。

「……地下？」
俺が呟くと、女性魔導士がこちらを向く。長い髪を一つに纏めたポニーテールが、彼女の動きに合わせて揺れる。
「ああ、このポラリスはとある場所の地下にある」
厳格そうな女性だが会話には応じてくれそうだったので、俺は抱いていた疑問をそのままぶつけてみた。
「こんなに広い地下空間をどうやって作ったんですか？」
「作ったのではなく、在るものを利用したのだ」
「在るもの？」
「三十年前の〝終末〟――幻変症のパンデミック。現在の基準で言うなら特級の幻獣災害によって生まれた〝クレーター〟がこの場所だよ」
彼女は身振りで眼下の景色を示す。
「まさかここまで……」
どれほどの爆発がここで起こったのか――それを引き起こしたモノが何だったのか、想像すらできずに俺は息を呑んだ。
「終末期――レベル7まで進行した幻変症患者は、この規模の被害を引き起こす。君はこ

れから彼らを扱うことになるのだから、よく覚えておくことだ」
扱う――。
その言葉に胸の内側がざわめく。
「……」
彼女は黙った俺をしばらく見つめていたが、やがて溜息を吐いて視線を外した。
会話の途絶えたエレベーターの籠は、クレーターの地面よりさらに下へと降りていく。
景色は再び武骨なシャフトの内壁に覆われた。
まだ降りるのかと思った俺の考えを読んだかのように、彼女は口を開く。
「このポラリスは新規の獣魔導士を教育し、相応しい階位を授与する場所だが、本来の役割は幻変症患者の隔離施設〝檻〟だ。それはこのクレーターのさらに地下深くにある」
「俺は……そこで何を？」
半ば予想はついていたが、あえて俺は問いかけた。
すると彼女は手にしていたタブレット端末を俺に渡す。
「ポラリス第二十一期生、昏部玖郎。獣魔導士候補生として入学を認められた君には、暫定的に〝第二階位〟の称号が与えられた。そして階位の数字は、所有できる〝使い魔〟の数でもある」

そう言いながら、彼女はタブレットの画面に触れた。すると顔写真付きのリストが表示される。
「それが〝檻〟に現在収容されている幻変症患者のリストだ。その中から二人、使い魔とする者を選べ」
「っ……」
奥歯を噛みしめ、何とか無表情を保った。
けれど内心はこれ以上ないほど荒れている。
幻変症患者がどう扱われているかを知らないわけではなかった。全て理解した上で、それでも〝彼女たち〟に会うため、ここまで来た。
こんなにも動揺したのは、俺が最も恐れている可能性を今から確かめねばならないから。
「――――」
俺はかすかに震える指で画面をスクロールさせ、〝彼女たち〟の顔と名前を探す。
もし〝生きているのなら〟このリストに含まれているはずだ。だがもしも居なかった時は――。
喉が渇く。ごくりと唾を呑み込んで、リストに目を走らせる。
「あ」

思わず声が漏れた。
患者名、柊遊奈。年齢、十六。身体能力ランク、B。区分、上位狼種詳細不明。能力、不明。特記事項、使い魔オファーの辞退十回以上。
患者名、柊利亜。年齢、十四。身体能力ランク、E。区分、下位巨種詳細不明。能力、不明。特記事項、反抗的。
――間違いない。
それぞれ成長しているものの、顔写真は俺がよく知る姉妹のものだ。
「めぼしい者を見つけたようだな」
獣魔導士が俺の反応を見て声を掛けてくる。
「――はい。彼女たちに、会わせてください」
タブレットに表示されている二人を、俺は指差した。
「ふむ……柊姉妹か。妹の方はともかく、姉の身体能力は非常に高い。いいところに目を付けたと言いたいが――契約は難しいだろうな」
「何故？」
「彼女たちはこれまでの申し出を全て断っている。最初期とは違い、現在のグリモワール・リングによる主従契約は対等で厳格なものだ。患者の同意なしに、使い魔とすること

はできん。この姉妹はどんな好待遇にも靡かない。話しても時間の無駄だろう」
肩を竦め、他の者にしろと促す彼女だったが、俺は首を横に振る。
「いえ、会ってみなければ分かりません」
他の者に会うつもりなどない。俺は遊奈と利亜に会うため、魔導の力を手にし、このポラリスに〝入学〟したのだ。
「……頑固だな。まあ、好きにしたまえ」
呆れた様子で彼女は頷く。
そこでちょうどエレベーターが停止し、扉が開く。
その先には薄暗く細い廊下が続いていた――。

面会室の扉は金庫のように分厚く、中は二重の格子と透明な遮蔽板で区切られている。
幻変症患者との〝契約内容〟は、魔術的にも重要な意味を持つため、この中での会話は秘匿事項。外に漏れることはないらしい。
一人で面会室に通された俺は、格子の向こうに見える扉をじっと見つめた。
そこを通って二人が現れるはずだから。

五分ほど経った頃、室内にガチャリと鍵が開く音が響く。
ゆっくりと開いていく向かいの扉。こちらと同様に、その扉は異様に分厚い。
そして扉が開き切ると、二人の少女が並んで面会室に入ってきた。
五年前の〝あの日〟が重なる。
狼のような耳と尻尾、山羊のような捻じれた角――人間にはない部位を有する彼女たちは、怯えと敵意が入り混じった表情を浮かべていた。
五年前と違うのは、成長した体とその手首に在る銀色の〝腕輪〟。お洒落さの欠片もない、病院着のような簡素な服。
「申し訳ないけど、私たちは誰かの使い魔になるつもりはないわ。たとえどんな条件を出されても、幻獣として生きたくないの」
「あんたたち獣魔導士のドレイになるなんて、あたしはまっぴらごめんよ！　あたしと姉様は人間なんだから！」
二人は部屋の入り口で足を止め、それぞれが拒絶の言葉を述べる。
先ほど聞いた通り、二人は獣魔導士と契約することを徹底的に拒んでいるらしい。
こちらをまともに見ようともせず、そのまま背を向けようとする少女たちに、俺は静かに声を掛けた。

「そんなこと言わないで、少しだけ話をしてくれないか。ようやく――五年ぶりに会えたんだからさ」
その瞬間、二人は弾かれたように振り返る。
もしかしたら忘れられているかもしれない。今の俺を見ても分からないかもしれない。
背が伸びた。顔つきが変わった。声だってあの頃よりずっと低くなった。自分のことを〝僕〟と呼ぶのをやめた。話し方もたぶん変わった。
だから分からなくても仕方ない。そう思っていたけれど――。
部屋に沈黙が落ちる。
ガチャン。
彼女らが入ってきた扉が、音を立てて閉まった。
それが合図だったかのように、二人は声を発する。
「え……うそ――」
利亜が唇を震わせた。
「まさか――」

遊奈は大きく目を見開く。
そして二人は同時に、俺の方へ駆け寄って来た。
「うそ……ホント!? 本当に……兄様?」
信じられないといった様子で、利亜は遮蔽板に額を押しつけ、俺の顔をじっと見つめる。
「間違いない……本物……本物のクロくんよ。だってこの匂い――忘れるはずないわ」
狼種の形質が色濃く出ている遊奈は、鼻をくんくんと鳴らし、瞳に涙を浮かべた。
「ああ、俺だ――〝玖郎〟だよ。利亜、遊奈……久しぶり」
ぎこちない笑みを俺は姉妹に返す。
「兄様……ホントのホントに兄様なんだ……でも何で……ここには獣魔導士や候補生しか入れな――」
そう呟いた利亜は、俺の服装を見て硬直する。
「クロくん、まさか……」
目を見開く遊奈に、俺は頷いた。
「俺は、獣魔導士候補生としてここに来た」
そして俺は一度深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。
さっき、遊奈は言った。使い魔になるつもりはない、幻獣として生きたくはないと。

利亜も言った。獣魔導士の奴隷になるのはまっぴらごめんだと。
だからこれから提案するのは、二人の意志に反するもの。
でも今の俺にはこの方法以外、彼女たちを救う術をもっていない。
「兄様……?」
利亜はまだ事態を呑み込めていない表情で俺の名を呼ぶ。
「クロくん……」
遊奈は俺が何を言おうとしているのかを悟ったのか、酷く悲しげな顔で俺を見つめた。
そんな姉妹に俺は告げる。
「二人にお願いがある。俺の――使い魔になってくれ」

3

「まさかあの姉妹が契約を結ぶとはな。君はよほど交渉上手なようだ」
面会室を出た俺に、女性の獣魔導士は笑みを浮かべて言う。
面会室での会話は秘匿されるという話だったが本当かどうか――。
実は俺たちの話を聞いていたのではないかと疑うものの、彼女の表情から真偽を測ることはできない。

「……タイミングなどもあったのだと思います。こんな地下深くにずっと隔離されているんですから」

当たり障りのない返事をした俺を見て、彼女は小さく笑った。

「ふ……まあ、そういうことにしておこう。では、これが彼女たちの腕輪と対応するグリモワール・リングだ。その指輪をつけて規定の儀式を行うことで、腕輪は〝契約の首輪〟に変じ、君は二人の〝主〟となる」

彼女が差し出してきた二つの指輪を俺は受け取る。

――主、か。

「現在、彼女たちの腕輪には地脈から魔力が供給され、病の進行を抑え込んでいる。それが地下深くに〝檻〟を作った理由の一つだ」

彼女は施設の廊下を示してから言葉を続ける。

「ゆえに患者を〝檻〟の外へ連れ出す場合、主となった者が代わりに魔力を供給しなければならない。魔力の供給は指輪を嵌めるだけで自動的に行われる。正式な契約は後で構わないが、指輪は今から着けておくように」

俺は手の平にのる二つの指輪をじっと見つめた。

表にも裏にも複雑な文様が刻まれている。高度な技術で作られた魔導具であることは間

違いない。

「幻変症患者にとって、獣魔導士は命綱でもあるんですね」

俺は指輪を右手の人差し指と中指にはめて言う。

「その通りだ。そして使い魔が為したことの責任は全て君に在る。万が一、レベル5まで病状を進行させた場合、使い魔は駆除され――君は大きなペナルティを負うだろう。どのような時もその指輪を外さぬよう、気を付けることだ」

彼女の忠告を聞きながら、俺は拳を握りしめた。

「はい――絶対に外しません」

誰が何を言おうと、どんなことがあろうと俺はこの指輪は手放さない。

これは俺がようやく手にした――二人との〝繋がり〟なのだから。

そんな俺を見つめ、彼女は言う。

「ともあれ、これで君は入学の条件を満たした。ではそろそろ名乗っておこう。私は薤里亮子。ポラリス獣魔導士養成学園――通称〝学園〟で教鞭を執る獣魔導士であり、君たち二十一期生の〝担任導師〟だ」

これから俺の担任になるという獣魔導士――薙里導師と共にエレベーターの前で待っていると、廊下の奥から遊奈と利亜がやってきた。

これから生活拠点が変わるというのに、二人は手ぶら。つまり持ち出す私物が特になかったのだろう。それだけでこの五年、彼女たちがどれほど不自由な思いをしていたのかが垣間見える。

「……」

遊奈は何も言わず、俺をじっと見つめた。

利亜も無言で俺を睨む。

――やっぱり怒ってるよな。

二人の視線を感じつつ、俺は気まずい思いを抱いた。

実を言うと、彼女たちとの契約はまだ成立していない。

俺はかなりズルい手を使ったのだ。

使い魔になって欲しいと申し出た後、俺はこう言った。

詳しい事情は一緒に来てくれたら、安全な場所で話す。これ以上、この場で会話はできない――と。

それでも二人なら俺を信じてくれると思っての選択だった。たとえ表向きは秘密が守られると言われている場所でも、俺の〝目的〟を話すのは憚られたから。

予想通り、遊奈と利亜は一先ず俺の提案を受け入れてくれたが……その瞳には疑念と不安の色が滲んでいる。

「ではこれから君たちが生活する場所へ案内する。ついてきたまえ」

薙里導師はエレベーターに乗り込み、俺たちを促した。

「行こう」

俺が声を掛けると二人はどこか躊躇いがちにエレベーターの籠に入る。

そこからはひたすら無言で薙里導師について行くだけ。

エレベーターで地上――とは言ってもフタをされたクレーターの中だが――に出た後は、自動運転のケーブルカーに乗って斜面を下っていく。

ケーブルカーには俺たち以外誰も乗っておらず、窓から見える建物や道にも動く者の姿はない。

まるで無人のようだが、そんなはずはない。恐らく施設の大きさに対して、人口が少なすぎるのだろう。

遊奈と利亜にとっては五年ぶりの〝外の景色〟で、さらにクレーターに作られた独特な形状の施設群だというのに、二人はまだ俺を見つめ続けている。

ひと時も目を離そうとしない。利亜は時折、何か言いたげに口を動かすが――遊奈がそれを窘めていた。

詳しい事情は安全な場所で話すと言った俺の意図を、遊奈はちゃんと理解してくれているらしい。

対して利亜は、俺の態度に不満があるらしく、視線が合うと頬を膨らませて睨み返してくる。

「――――」

どうしていいか分からず、苦笑いを浮かべた。

すると利亜はぷいと顔を背ける。

そんなやり取りを繰り返していると、何番目かの駅でケーブルカーが停車した。表示されている駅名は〝学生寮前〟。

ケーブルカーを降りた目の前に、四階建てのマンションが複数立ち並んでいる。

「君の部屋はA棟の401号室だ。制服と共に支給した個人用端末がキーになっている。必要なものは部屋に用意してあるので、明日の入学式までに本契約を済ませ、しっかり準備をしておくように」

薙里導師はそう言うと、再びケーブルカーに乗り込んだ。

どうやら案内はここまでらしい。

「はい、わかりました」

俺が頷くと、彼女は笑みを浮かべる。

ドアが閉まり、ケーブルカーはクレーターの中心部へと下っていった。

胸元のポケットから手の平サイズの個人端末を取り出し、センサーに翳す。

するとガチャリと解錠の音が響き、俺は401号室の扉を開いた。

マンションの外観と、フロアに上がってからの扉の数で予想は付いていたが――中は非常に広い。

玄関から奥のリビングに続く廊下には、いくつもの扉がある。

部屋数は五。十畳ほどあるリビングには既にソファなどの家具が用意されていた。冷蔵庫や電子レンジ、エアコンといった家電も一通り揃っている。

これだけ部屋が広いのは、獣魔導士候補生がそれほど多くないのと、最初から使い魔との共同生活を想定しているからだろう。各部屋を確認すると、ベッドが置かれた寝室は三部屋もあった。

「クロくん……そろそろ、いいかな？」
室内を一通り改めてリビングに戻ってくると、遊奈がおずおずと話しかけてくる。
ここでなら話をしてもいいのかという問いかけだと思うが――。
「悪い、少しだけ待ってくれ」
俺は彼女を制止し、自分の人差し指を犬歯で傷付けた。
「あっ……」
俺の指先に浮かび上がる血の球を見て、利亜が声を上げる。
けれど俺はそれには構わず、自らの〝名〟を示す魔術記号を四方の壁に手早く描いた。
「――創城」
そして短く告げ、魔力を流し込む。
すると魔術記号が赤く発光し、部屋全体が淡い光で包まれた。
「これ……魔術？　やっぱりクロくんは本当に……」
遊奈はその光景に息を呑んだ。
俺は彼女に笑みを向け、やっと準備が整ったことを伝える。
「ああ、この部屋を俺の支配する空間に作り変えた。これも一種の使い魔みたいなものだ。ここでなら誰にも会話を盗み聞きされる心配はない」

するとそれを待っていたように、利亜が前に出てきた。
「じゃあどうしてこんなことになったのか――聞いていいのね？　兄様」
小柄な利亜は俺を至近距離から睨め上げる。
「……もちろん。きちんと話すよ。けど最初にまず謝らせてくれ。絶対助けに行くって言ったのに――五年も掛かった。待たせて本当に悪い。気持ちが収まらないのなら……まずは一発、思いっきり殴ってくれ」
明らかに怒っている様子の利亜に俺は謝った。
「っ……！」
それを聞いた彼女は勢いよく腕を振り上げる。
獣化が進行した幻変症患者の筋力は常人を遥かに凌ぐ。下手をすれば即死しかねないが、俺は覚悟を決めて身構えた。
「ばかっ！」
ぽすっ――。
しかし予想に反して、俺の胸に叩きつけられた利亜の拳に力は籠っていない。
「ばかばかっ！　兄様のばかっ!!　あたしはそんなことで怒ってるんじゃないわよ！　兄様は……相変わらず、ホントにばかよ！」

悔しそうな表情を浮かべた利亜は、俺に背を向け、逃げるように遊奈の後ろに隠れる。
「利亜……」
俺は彼女が何に対して腹を立てているのか分からず困惑の表情を浮かべた。
すると遊奈が苦笑を浮かべ、ゆっくりと近づいてくる。
「クロくん、私たちは待ってなんかいなかったのよ？」
「――――」
その言葉に俺は息を呑んだ。
けれど遊奈は俺の顔を見て、慌てて首を横に振る。
「クロくんと会いたくなかったわけじゃないわ。当然……すごく、すごく会いたかった。だけどそれは絶対に叶わない夢だと思っていたの。だって、ポラリスの〝檻〟に収容された幻変症患者に接触できるのは魔術を使える人だけだって知っていたから」
「だから俺は、獣魔導士の候補生としてここへ来た」
頷く俺だったが、遊奈は納得できないという様子で言葉を続けた。
「でもクロくんは、魔術なんか使えなかったじゃない！　魔導士ってなろうと思ってなれるものじゃないって、私は知ってるわ。ちゃんとその〝家〟に生まれた人じゃないとダメだって、聞いたことがあるもの」

遊奈が抱く疑問はもっともなものだった。
五年前は俺も自分にそんな資格があることは全く知らなかったのだから。
「――父方の遠い親戚が、そういう〝家〟だったんだよ。そして都合がいいことに、そこは後継者を探していた。血縁があれば〝資格〟はある。だから俺は養子になって、魔術を継承したんだ」
簡潔に自分が魔術を手にした経緯を語る。
詳しく話さなかったのは、それがあまりにも〝おぞましい〟日々だったからだ。
俺が味わった地獄など、遊奈や利亜は知らなくていい。知って欲しくない。
どうしようもないほど、俺の手は汚れている。俺がどれほどのものを犠牲にしてきたかを知れば、遊奈と利亜は責任を感じてしまうかもしれない。だから絶対にそこは秘密にするつもりだった。だが――。
「そう……きっと、すごく頑張ってくれたのね……クロくん」
遊奈は俺の首に手を回し、胸元へと引き寄せる。
「な――」
初めて彼女と出会った時を思い出す、温かな抱擁。けれどあの頃より大きく成長した彼女の胸は、俺の顔を柔らかく包み込んだ。

「よしよし」
そして頭を撫でられる。
それはとても心地いい感触だったが、全てを見透かされたかのような焦燥を感じ、俺は慌てて彼女から離れた。
「い、いきなり何をするんだよ」
「え？　だってクロくんがすごく辛そうだったから」
抗議する俺に、きょとんとした表情を向ける遊奈。
その後ろから利亜がジト目で睨んでくる。
「兄様のえっち。顔真っ赤」
「っ……仕方ないだろ」
俺は顔が熱くなっているのを自覚しつつ、強引に話を戻した。
「俺が魔術を継承して、ポラリスの獣魔導士候補生になれたのは、そういうわけだ。けど、俺はただ二人に会いにきたわけじゃない」
その言葉に遊奈と利亜は驚いた表情を浮かべる。
「どういうこと、クロくん」
「兄様……何だか、ちょっと怖いわ」

体を硬くする姉妹に、俺は自分の目的を語っていく。
「セプテントリオンが外部の魔術継承者を受け入れているのは、幻変症患者を〝使い魔〟として使役する獣魔導士が不足しているからだ。このまま普通にポラリスを卒業しても、軍や警察に配属されて、ずっと二人を戦わせ続けなきゃいけなくなる」
苦々しく俺は吐き捨てた。
かつて日本と呼ばれていたこの場所は、今や魔導士による魔導士のための国家だ。しかし建国から二十年以上経ち、支配構造――社会システムはほぼ完成している。よって新規の魔導士が就ける役職は限られている。
「本当は……二人を〝檻〟から連れ出せたら、そのまま一緒に逃げようかとも考えた。けどそれじゃ一生追われる身だ。だから俺は真っ当な方法で戦おうと思う」
「真っ当な方法？」
首を傾げる利亜。
俺はここでようやく、決して他の者には聞かれるわけにはいかない本音を告げた。
「俺は獣魔導士として昇りつめ、執行機関や軍部を統べる七つの座……〝七星〟の地位を手に入れる」
「七星……」

利亜は俺が口にした単語を繰り返した。
「セプテントリオンは魔導軍事国家だ。軍部の方が行政機関より力を持ってる。だから七星こそが国の頂点。その一人となって、俺は遊奈や利亜のような幻変症患者が〝人間として〟生きられる世界を作る。そのために――いや、〝それまで〟は俺の使い魔として力を貸してくれないか？」
二人の目を見つめ、俺は姉妹と結ぶ〝契約〟の内容を口にする。
「ええ、分かったわ」
遊奈は即答だった。
あまりに迷いのない返答に俺は戸惑い、利亜も焦った様子で言う。
「ちょっ、ちょっと姉様！　本気なの!?　兄様はあたしたちに〝幻獣になれ〟って言ってるのよ!?　使い魔は戦いの道具なんでしょ？　いつか人間として生きるために今は人間を止めろって……そんなの無茶苦茶だわ！」
利亜の叫びは俺の胸に深く突き刺さった。
だが何も言い訳はできない。本当にその通りなのだから。
「それにどうしてあたしたちが戦わなくちゃいけないのよ！　他の……もっと強い子を使い魔にして、上を目指せば――」

「利亜、それは間違った方法よ」
興奮する利亜の言葉を、遊奈が優しく遮る。
「……姉様？」
「だってこれは、〝私たちが幸せになるための戦い〟だもの。そのためにクロくんが他の子を利用したら利亜は怒るでしょう？　たとえそれで自由になれても、幸せだと思える？」
「それは……」
言葉に詰まった利亜の頭に、遊奈は手を置いた。
「これがきっと、クロくんが考えてくれた〝みんなで幸せになれる方法〟なのよ。だから私は使い魔になることは怖くない。たとえそれで今は家族じゃなくなるとしても……」
そう告げた遊奈は俺にも儚げな笑みを向ける。
――遊奈。
五年も離れ離れになっていたのに、再会して一時間も経っていないのに、これほど見透かされるものなのだろうか。
利亜は遊奈の言葉を聞き、唇を噛む。
「……そんなこと言われたら、あたしだけ逃げられないじゃない」
そう呟いた利亜は、キッと俺を睨む。

「分かったわよ！　あたしもやるわよ！　でもあたしに宿ってる幻獣は、姉様のと違って全然役立たずなんだからね！　兄様、絶対に後悔するわよ！」

怒鳴り声で利亜は俺との契約を了承した。

すると遊奈は念押しするように言う。

「ねえ、クロくん。私たちはずっと人間で在ろうとしてきたけれど……それでもどうしようもなく〝はしたない獣〟なの。ちゃんと躾けてくれないと……本当にいつか後悔するかもしれないわ。契約するのなら、それだけは覚えておいてね？」

彼女の表情はとても真剣で、瞳には何かをひどく憂えている色があった。

「大丈夫だ、絶対に後悔なんてしない。後悔をしないように、主人として最善を尽くすから――二人とも、これからよろしく頼む」

俺が強い口調で言うと、二人は首を縦に振る。

「……ありがとう」

俺は礼を言い、彼女たちの腕輪とリンクする指輪に左手で触れる。

そして二人に契約の儀式を行うためにまずやるべきことを告げた。

「じゃあ服を脱いでくれ」

「へ？」

利亜がピシリと硬直する。

「あら……」

遊奈は頬を染め、口元に手を当てた。

その反応を見て、俺はハッとする。

「ち、違う、変な意味じゃない！　俺が継承した魔術は使い魔の〝創造〟に特化していて、この契約も通常より効果的なものにできるんだ。でも効力が強いせいで、服を着てたらその服まで使い魔にしてしまう。だから――」

早口でこれは魔術的に必要なことなのだと俺は説明した。

「もう……クロくんは相変わらずえっちなんだから」

遊奈は溜息を吐き、はらりと服をはだける。

「兄様のヘンタイ！　すけべ！」

利亜は顔を真っ赤にして怒鳴り散らす。

「は、話を聞いてくれ！　脱ぐ時はちゃんと後ろを向いてるから！」

そう叫んで俺は二人に背中を向けたのだった。

薄暗い室内に漂うのは、微かな血の匂いと甘い体臭。
部屋の床に描かれた七層の多重魔法円――その塗料には俺と彼女たちの血を混ぜてある。
そして魔法円の中心で、遊奈と利亜が契約の交わされる時を待っていた。
「グリモワール・リング、起動。外部回路――昏部式魔法円とリンク、機能拡張」
右手を掲げて告げると、人差し指と中指に嵌めた指輪が輝き始めた。
それと呼応するかのように、魔法円も光を放つ。
二人の少女はびくりと体を竦め、怯えた表情で視線を巡らせた。
「第二階位の権限において、今ここに契約を結ぶ――柊遊奈、柊利亜、汝らは我が獣となるか」
重々しく問いかけると、姉妹は俺に目を向けた。
二人とも顔は羞恥で上気し、肌は汗で湿っている。その瞳に浮かぶ感情は、対照的。
遊奈はどこか悲しそうな、揺れる瞳で俺を見ている。
利亜は怒ったような、悔しそうな瞳で俺を睨んでいる。
だがそれでも、二人の答えは同じだった。

「――はい」

姉妹の声が重なり、指輪と魔法円がさらに眩い光を放つ。
「んっ……ああっ!?」
「やっ――!?」
光の中で嬌声が響く。
パンッと二人の腕輪が砕け散り、光の粒子となって彼女たちの首元へ集束する。
そして一際眩い輝きが溢れ、弾けて消えた。
「あ……」
遊奈と利亜は恐る恐る首に手をやる。そこにあるのは俺と彼女たちの契約の証――俺の指輪と対になる銀色の首輪。さらに俺が追加した昏部の術式によって、二人の下腹部には俺の魔術記号が痣のように浮かび上がっている。
契約は成された。
これでもう彼女たちは、俺の幼馴染でも、家族でもない。人ですらない。
二人は俺――昏部玖郎に使役される〝幻獣〟だ。
二人が人間として生きられる世界を作る――その契約が果たされる時まで。

第二章　ポラリスの新入生

1

輝くような日々だった。

「あ、クロくん！　こんなところにいたのね！　ほら、クッキー焼いてみたのよ。食べてみて」

広い屋敷が落ち着かなくて、物置や書庫に閉じこもっていても、何故か遊奈はすぐに〝僕〟を見つけてしまう。

「兄様！　何ぼーっとしてるのよ！　暇ならあたしの買い物に付き合ってよね！」

休日に一人で過ごそうとしても、利亜は強引に僕を外に連れ出す。

何故これほど自分に構うのか、僕はとても不思議だった。

僕が二人の立場だったら――いきなり増えた家族に、ここまで親しくできるとは思えない。

だからある日、二人にその疑問をぶつけた。すると二人は少し戸惑った様子を見せてから、少し照れ臭そうに答えた。

「どうしてって言われても分からないわ。だって一目見て、放っておけないって思っちゃったんだもの。ふふ、ひょっとするとこういうのが一目惚れって言うのかもしれないわね」

冗談っぽい口調で遊奈は笑う。

「あたしは別に構おうとしてるわけじゃないわよ！　兄様には兄様らしくなってもらいたいだけ！　放っておいたら立派な兄様になれないでしょ？」

利亜は腰に手を当てて言うが、遊奈はからかうように問いかけた。

「じゃあクロくんが立派な兄様になった後はどうするの？」

「そ、それは――」

そこで顔を赤くし、俯く利亜。

僕はそれを見て、二人が向けてくれている感情が〝好意〟だと知った。

そしてその時、僕は初めての恋をしたのだ。

今も同じ気持ちが胸の奥に宿っている。

けれど、今の〝俺〟は理解していた。

遊奈と利亜が当時既に幻変症の因子保持者だったからこそ、彼女たちは俺に惹かれたの

だと――。

懐かしい夢が遠のく。

甘く、優しく、どこか懐かしい香り。

とても柔らかで、温かな感触。

「ん……？」

目を開けると、真っ白で大きな胸の谷間がそこにあった。正確に言うと、俺はその谷に鼻先を突っ込んでいた。

「な――」

状況を理解した俺は慌てて顔を引こうとしたが、頭が動かない。ぎゅっと両手でホールドされている。

視線を動かすと、微笑みを浮かべた遊奈と目が合った。

「ふふ……おはよう、クロくん」

狼の耳をぴくぴくと揺らし、朝の挨拶をする遊奈。

「遊奈――何で……別々の部屋で寝たはずなのに……」

今も鼻先で触れている胸の柔らかさに鼓動が速まるのを感じながら、俺は問いかける。

「だってやっと再会できたんだもの……こんなに近くにいるのに、別々の部屋で寝るなんて寂しいわ」

瞳を揺らし、遊奈は答えた。

俺たちの関係性は〝姉弟〟から〝主従〟へと変わったが、幼い頃に積み重ねた思い出と絆は変わらない。

そのことにホッとしつつも、胸の奥に痛みを覚える。たぶん見ていた夢のせいだろう。

「クロくん……どうしたの？　とても悲しそうな顔よ？　辛いことがあるなら、全部お姉ちゃんに吐き出して？」

そう言うと彼女は、さらにぎゅっと俺の頭を抱きしめた。

顔全体が柔らかな膨らみに埋もれ、その心地良さに胸に刺さったトゲが溶けていく。

何て優しいんだろう。こんなに優しくされると、色々なことを忘れそうになる。

……でも、そんなわけにはいかない。

「ありがとう――だけど、もう大丈夫だ。そろそろ離してくれ。まだ目覚ましは鳴ってないけど、早めに起きて準備をしたい。今日は入学式だからな」

俺は小さく首を横に振り、解放してくれるよう訴えた。

「うーん……でも、私だけ離しても意味はないかもしれないわよ？　ほら、そこ」
腕を離した遊奈の視線の先を辿ると、俺の腰に回されている腕に気付く。
「ま、まさか――」
限界まで体を捻じって確認すると、俺に後ろから抱き付いている利亜を見つけた。
彼女の頭から生えた角が背中に喰い込んでいて、微妙に痛い。
「きっと利亜も寂しかったのよ。でもこの子、寝起きは悪いからなかなか離してくれないかもね」
苦笑交じりに言う遊奈に俺は慌てる。
「お、おい利亜！　起きてくれ！」
大声で呼びかけるが、利亜は目を開けずもごもごと寝言を漏らした。
「んぅ……兄様……何やってるのよ……ばか……」
寝言であっても彼女は俺に文句を言う。
夢の情景と重なって心が軋むが、俺は感傷を無理やり呑み込んで、利亜を揺さぶった。
「利亜、頼む――目を覚ましてくれ！　って遊奈もどさくさに紛れてまた抱き付くなって！」
「えー、だってどうせ動けないんだしー」

甘えた声で言う遊奈。
「うるさいわよ……兄様」
利亜は目を開けず、ぎりぎりと俺の腰を締めあげる。
ポラリスでの最初の朝は、そんな風にして始まった――。

2

「準備はできたか？」
獣魔導士候補生の黒い制服に着替えた俺は、玄関で二人に確認する。
朝食は食堂かルームサービスかを選べるシステムで、今日は部屋で取った。入学式前に他の生徒と会うのはなるべく避けたかったのだ。
ポラリスに集ったのは世界各地で魔術を受け継いできた者たち。それぞれがどんな力を持っているか分からない以上、下手に接触するのはリスクがある。
「もちろん！　ばっちりよ、兄様。尻尾用の穴も姉様に開けてもらったし」
女子用の制服を着た利亜は俺に背中を向けると、スカートからぴょこんと飛び出した短い尻尾を振ってみせた。
「私たち、中学生になる前にここへ送られたから……こういう学生服を着られて、本当に

嬉しいわ。しかもクロくんと一緒に通学できるなんて！」

遊奈はスカートをひらひらさせながら言う。スカート上部の穴から出ているフサフサした狼の尻尾も、嬉しそうに揺れている。

だが俺は二人の言葉を聞いて、一つ注意すべきことに気が付いた。

「二人とも、部屋の外では俺をマスターと呼んでほしい。俺たちが元から親しい間柄だと他の生徒に知られると、そこを突かれるかもしれない」

「ええー、そんなぁ……私、クロくんって呼べないのは悲しいわ」

しゅんとする遊奈に心が揺らぐが、ここは譲れない。

「頼む、二人のためなんだ。実戦形式の訓練があったとしたら、俺の動揺を誘うために、過剰に遊奈たちを傷つけようとする奴が出てくる可能性がある」

「う……それを聞いたら、断れないわね。でもマスターって呼び方は何だか味気ないわ。せめて……ご主人様じゃダメ？」

首を傾げ、上目遣いで問いかけてくる遊奈。

「い、いや、別にダメじゃないが……」

正直、その呼ばれ方はかなり心が揺さぶられたが、意味合いはマスターと変わらないので否定する根拠はない。

「ホント？　ありがとう、ご主人様」

嬉しそうに尻尾を振り、遊奈は喜ぶ。

その隣で顔を赤くしていた利亜は、俺と視線が合うと眼差しを鋭くした。

「あたしは普通にマスターって呼ぶわよ！　ご主人様なんて呼ばせようとしたら、噛み付くから！　いいわね！」

「お、おう。じゃあ行こう」

俺は頷き、４０１号室の扉を開け、学生寮を後にした。

地下空間だというのに、緑の匂いが混じるさわやかな風を感じる。恐らく大規模な空調設備が機能しているのだろう。

ここでも他の生徒との接触を最低限にするため、かなり余裕を持っての登校だ。

狙い通り、他の生徒たちの姿はない。

時間帯で照明の色を変えているのか、蓋をされたクレーター内の景色は昨日より少し青みがかって見える。

昨日はカーテンを閉め切って契約の儀式をしていたので見逃がしたが、恐らく夕方は照明が赤くなり、夜はきちんと暗くなるのだろう。

「――学園まではケーブルカーで行くのか」

支給された個人端末でポラリス内のアクセスを確認した俺は、学生寮前にあるケーブルカーの駅に向かった。

「あたしたちずーっと地面の下に閉じ込められてたけど、ここもまだ地下みたいなものなのね」

昨日はほとんど景色を見ていなかった利亜は、高い天井を見上げて言う。

ここはクレーターの縁と中心のちょうど中間辺りだが、それでもあの蓋まで二百メートル近くはあるように思えた。

「ああ、たぶん正式な獣魔導士になるまでポラリスの外には出られない。本当の空が見られるのは――まだしばらく先だな」

俺がそう呟いた時、遊奈が口を開く。

「クロく――じゃなくて、ご主人様。駅に誰かいるわ」

くんくんと鼻を鳴らす遊奈の言葉を聞き、俺はケーブルカーの駅に視線を戻した。

ホームの壁が邪魔で姿は確認できないが、遊奈は匂いで察知したらしい。

「――わかった」

さすがに全員を避けるのは無理だろうと、俺は覚悟を決めて駅に入る。

改札はなく、駅員もいない簡素なホームには、既に三つの人影があった。

一人は俺と同じぐらいの年に見える少年。東洋人のようだが髪の色素は薄く、長い前髪が片目を隠している。

そして彼の脇に控えているのが、首輪を付けた十一、二歳ほどの男の子。二人とも黒髪おかっぱで、顔も同じ。唯一の違いはその背から生えた片翼の羽色だ。一方は右の翼しかなく、色は黒い。もう一方は左の翼しかなく色は白。

この双子が少年の使い魔なのだろう。

「よお、もしかしてご同輩かい？　それとも先輩ですかね？」

少年は俺を見ると、気さくに話しかけてきた。

「お前が今日入学する第二十一期生なら、同輩だよ」

三メートルほどの距離を空けて立ち止まり、俺は彼に応える。

「おお、そっか。なら、よろしくな。俺は朱門鳥彦。鳥彦でいいぜ。で、こいつらが使い魔の羽黒と羽白だ。双子だが、見た目通りの名前で分かりやすいだろ」

少年――朱門鳥彦は自分の名を名乗り、使い魔のことも紹介した。

双子の男の子は礼儀正しくぺこりと頭を下げる。

見たところかなり友好的だ。上を目指すと決めた以上、全ての候補生はライバルだがあえて敵を増やす意味はない。

「俺は昏部玖郎。玖郎でいい。こっちの二人は遊奈と利亜だ」
短く名乗ってから、俺は後ろにいた姉妹を示す。小さく会釈をする遊奈と利亜。
「昏部……？　もしかして国内の血族か？　けど、聞いたことねえな」
昨日ヘリで会話したアリスと同じようなことを言う鳥彦に、俺は苦笑を返した。
「ずっと山奥に潜んでいたせいで、出遅れた血族なんだよ。対して朱門家といえば、セプテントリオン設立に尽力した国内の最大派閥じゃないか」
朱門の姓は、政治絡みでのニュースではよく耳にする。加えてポラリスへ来る前に、有名な家系とその魔術系統は一通り調べておいた。
「はは、いくら派閥がデカくても〝七星〟にはなれてねえんだから大したことねえさ。外様にこの国を売り渡し、今も尻尾を振ってる腰巾着どもだよ」
皮肉な笑みを浮かべ、鳥彦は吐き捨てる。
「自分の家なのに、ずいぶんな言い草だな」
だがむしろそこに好感を抱きつつ、俺はからかうように言った。
俺も昏部家のことは心の底から嫌いだったから。
「事実だし仕方ねえだろ。ま、俺も適当に階位を貰って、一族の伝手で旨みのあるポジションに就職さ。たぶん玖郎の〝敵〟にはなんねえだろうから、仲良くしてくれよ」

へらへらと笑って手を差し出す鳥彦。
「……分かったようなことを言うんだな」
俺はその手を握らず、彼を睨む。心の中を見透かされたようで不快だった。
「そりゃ分かるさ。そんなにピリついてたら、勝手に敵ばかり増えてくぜ？」
にやりと笑う鳥彦は腕を振って握手を促す。
俺は溜息を吐き、渋々彼の手を握った。
「気をつけるよ。よろしく――鳥彦」
「おう、よろしく。よっしゃこれでボッチの学園生活は回避だぜ！　二人組を作ってーとかなったら絶対に組もうぜ、親友」
馴れ馴れしく肩を組んでくる鳥彦に、俺は顔を顰める。
「勝手に親友カテゴリに入れるな。まだ会ったばかりだろ。というか使い魔がいるんだから、どうやってもぼっちにはならないだろうが」
そう言って彼が連れている双子の男子、黒と白を視線で示した。
「ははは、そりゃそうか。にしても玖郎の使い魔は女なんだな」
じろじろと遊奈と利亜を見る鳥彦に、俺は眉を寄せる。
「何だよ、悪いか？」

「別に悪かねえよ。ただ珍しいと思ってな。使い魔は主との同調率が高いほど、幻獣本来の性能を発揮できる。だから同性を選ぶのが普通で基本だ。なんかその二人じゃなきゃいけねえ理由があるのか？」

使い魔との同調率の話は俺も知っていた。何しろ昏部家は、使い魔に関するエキスパートと言える家系なのだから。だが――。

「他人に話すことじゃない」

俺は鳥彦の質問を拒絶する。

「何だよー、親友だろ？」

「だから勝手に親友にするな」

まだ絡んでくる鳥彦に、俺は溜息を吐く。

ただ鳥彦も本気で聞き出そうというつもりはないようだった。

「ご主人様……」

「マスター……」

けれど遊奈と利亜が不安げな顔で俺を呼ぶ。今の話を聞いて、心配になったのかもしれない。

「大丈夫だ。俺の使い魔は、二人じゃないとダメなんだよ」

俺がそう言うと、彼女たちは表情を和らげる。

そこにようやくケーブルカーがやってきて、俺たちは傾斜に合わせて作られた車体に乗り込んだ。

アクセスマップによると、目指す学園は下り方向の一駅先。

正式名称はポラリス獣魔導士養成学園。

クレーターの中心部に向かって下り始めたケーブルカーの窓からは、既に学園の建物らしき六角形の巨大な〝塔〟が見えていた。

3

「はー、立派なもんだ」

鳥彦が六角形の塔――学園の校舎を見上げて呟く。

学園前駅でケーブルカーを降りた俺たちは、案内表示に従って新入生の集合場所へ向かっていた。

入学式はこの校舎ではなく、横にある体育館で行われるらしい。

校舎沿いの道を歩いて辿り着いた体育館は、イメージしていたものとはかなり違った。

広さはサッカーの試合ができそうなほど。天井は三階分ほどの吹き抜け。床も含めて頑

丈なコンクリート造りで、屋内演習場と呼んだ方がしっくりくる。
てっきり俺たちが一番乗りかと思ったが、体育館には先客がいた。
「また会えましたね――玖郎さん」
壁際に佇んでいた少女が、俺を見て微笑む。
「そうだな、アリス」
魔女の末裔だという少女――アリス・リライト。外来の獣魔導士候補生である彼女は、ポラリスに着いた時点で別の場所へ連れて行かれたが、どうやら問題なく入学を許可されたようだ。
アリスの傍には、使い魔だと思われる首輪付きの少女が二人立っている。
額から緑色の宝石が〝生えている〟金髪の少女と、瞳がルビーのように赤い黒髪の少女だ。鳥彦と同じく、彼女も同性を使い魔に選んだらしい。
だが特にアリスは彼女たちのことは紹介せず、俺に話しかけてくる。
「同期生として、これからよろしくお願いします。あなたとは何故だか、とても気が合いそうですから」
「……俺もそう思うよ。こちらこそよろしくな」
ヘリの中で話をした時から、俺も似たような感覚を抱いていた。

たぶん彼女も何か〝目的〟があると言っていたからだろう。
「はい」
頬を緩めて微笑んだアリスは、自分の使い魔たちの方に小声で何やら話しかける。どうやら俺と事前に面識があったことについて説明しているようだ。
すると俺の横にいた鳥彦が不満げに声を上げた。
「おいおい、俺のことはスルーかよ。アリスちゃんっていうのか？　新入生同士、俺とも仲良くしようぜ」
その言葉を聞いたアリスは鳥彦の方に目を向ける。けれど彼女の眼差しはそれまでと打って変わって氷のように冷たかった。
「――その必要は感じません。あなたとは気が合いそうにないので」
あまりにはっきりと拒絶され、軽薄な鳥彦もさすがにたじろぐ。
「あ、そ、そうっすか」
一歩後退した鳥彦は、俺に耳打ちしてくる。
「おい、玖郎。ありゃヤベーって。いったいどうやって気に入られたんだ？」
すると後ろで話を聞いていた遊奈と利亜も詰め寄って来た。
「ご主人様、私もその辺り気になるわ」

「マスター！　あの女とどういう関係なのよ！」
「いや、別に関係も何も――」
やけに真剣な二人に気圧されつつ、俺はヘリの中で少し話をしたのだと答える。
「そう、つまりは口説いたのね。ご主人様は欲求不満なのかしら……」
「マスターの女ったらし！」
けれど二人の機嫌は何故かさらに悪くなった。
そんな俺たちの様子を見て、鳥彦が呟く。
「何かお前ら、変わった感じの主従関係だな」
「――かもしれないな」
俺は複雑な思いを噛みしめながら、小さく頷いた。

しばらくすると体育館に他の新入生たちもやってくる。
髪色や顔立ちから見た限りだと〝国内〟と〝外来〟の割合はほぼ同じ。男女比は少し男子が多いという程度。
獣魔導士候補生となるのに必要な条件は、魔術が使えるということだけなので、特に年

齢制限はない。ただそれでも生徒はほぼ十代に見える。普通の学校で言えば、中学生から大学生までの範囲で収まる年齢層だ。

彼らが連れている使い魔も俺たちと同じ年代が多い。これは幻変症の発現が第二次性徴の頃であるのと関係していた。遊奈や利亜のように大体が十代前半でポラリスに収監されるため、二十代以上の者は〝これまで誰にも選ばれなかった者〟か〝使い魔になることを固辞した者〟の二通りとなる。そのため優秀で従順な使い魔を選ぼうとした場合、対象が若い年齢に偏るのだろう。

鳥彦は俺の傍から離れ、積極的に挨拶回りを行っていた。ぼっちがどうとか言っていたが、あれだけコミュニケーション能力があれば孤立することはないように思える。

けれど一つ気になるのは……。

「――もうすぐ時間なのに、集まりが悪いわね」

遊奈が俺の気持ちを代弁するかのように、体育館に集まった新入生を見回して呟く。

彼女の言う通り、広い体育館には十一組――使い魔も含めて三十三名しかいない。

「どうせ寝坊でもしたんじゃない？　魔導士ってそういう常識とかなさそうだし」

利亜はどうでもよさそうに肩を竦めた。

「いや、もしかしたらこれで全員なのかもしれない。魔術を使える人間は本当に限られて

いるからな」

俺がそう言ったところで、体育館の入り口から体格のいい男子生徒が入ってくる。くすんだ色の金髪をオールバックで固めた少年は、灰色の瞳で体育館内にいる新入生たちを睨みつけた。

歩き方と表情から傲岸さが滲み出ている。従えているのは灰色の毛並みを持つ二人の人狼。人狼を始めとする狼種は、幻変症患者の中で最もポピュラーなタイプだ。遊奈も上位狼種に区分されている。

だが彼の連れている使い魔は、遊奈よりも病状が進行していた。全身が体毛で覆われ、顔の骨格まで狼のように変化している。幻変症の進行段階はレベル1からレベル7まであるが、彼らはレベル2に属しているように思えた。

時間から見て、恐らく彼らが最後の一組。

男子生徒は無遠慮に新入生を眺めまわした後、何故か俺のところで視線を留めた。

「はっ――どいつもこいつも二流三流の田舎血族って感じだな。そんな中でもてめえは特に最悪だ」

真っ直ぐこちらへ放たれた暴言に、俺は顔を顰める。

「……いきなり何だ？　喧嘩を売ってるのか？」

そう問い返すと、彼はバカにした顔で首を横に振った。
「まさか。これは警告だ。男の癖に、女を使い魔にしてる時点で程度が知れる。そんな奴と同列に扱われるのは我慢ならねえんだよ！　目障りだ――殺されたくなけりゃ、とっとっとポラリスから失せやがれ！」
彼が大声で言い放つと、新入生の何人かは同調するかのような笑みを浮かべる。
遊奈と利亜は、彼の剣幕に驚いて俺の後ろに隠れた。
鳥彦にも珍しいと言われたが、異性を使い魔にしたことで俺は悪目立ちしてしまっているようだ。けれど……。
「ずいぶん勝手な言い草だな。彼女たちを使い魔にしたのは、俺なりの理由があってのことだ。お前にとやかく言われる筋合いはない。いったい何様のつもりだよ」
彼の敵意と殺意に竦むことなく、俺は冷静に言い返す。
昏部の後継者争いを勝ち抜いた俺にとって、こんな程度の脅しと殺気は慣れたものだった。
「何様だと？　じゃあ教えてやるよ。俺はアッシュ・グレイワース。〝七星〟の一人、クリア・ロードワースに連なる分家の出だ。そこらの奴らとは〝血〟の格が違うのさ」
堂々と言い放つ男子生徒――アッシュ・グレイワース。

彼の物言いと態度は心地よいものではないが、特に苛立ちは覚えない。
魔術を受け継ぐ〝血〟に誇りを持っている者の態度は、大体こんなものだと知っている。
昏部の奴らもほとんどが彼のような感じだった。
「ああ、そうかい。自己紹介ありがとう。俺は昏部玖郎だ。よろしくな」
話はそれで終わりだと俺は背を向け、遊奈と利亜を促して体育館の壁際に移動しようとする。だが後ろから激昂したアッシュの声が聞こえてきた。
「おい、待ちやがれ！　俺の話を聞いてなかったのか⁉　俺は失せろって言ったんだ！　使い魔を性奴隷か何かと勘違いしてる変態野郎が!!」
足が止まる。
もう相手にするつもりはなかったのに。ああいう輩は相手にするだけ時間の無駄だと分かっていたはずなのに。
「――今、何て言った？」
振り返り、問いかける。
俺についてきていた遊奈と利亜が、こちらの表情を見てビクリと体を竦めた。
だがアッシュは口の端を歪めて、さらなる暴言を口にする。
「性能が落ちるってのに、わざわざ異性を使い魔にするなんざ他に理由はねえよな。どう

せ昨日は一晩中お愉しみだったんだろ？　そいつらの具合はどうだった？　ま――俺には獣を犯す趣味はないからどうでもいいが」

軽蔑の眼差しで俺と遊奈、利亜を眺めるアッシュ。

「――――」

体が熱い。視界の端が白く霞み、思考が加速する。

あの口を黙らせるための方法が無数に浮かび上がり、どれを選択しようか検討を始めたところで気付いた。

――俺は怒ってるのか。

あまりに久しぶりな感情だったから、自覚するのが遅れてしまったらしい。

俺に対する暴言ならいくらでも聞き流せただろう。

でもダメだ。今の言葉は、遊奈と利亜のことも侮辱している。

「どうした？　やる気か？」

俺の雰囲気が変わったのを感じたのか、アッシュは挑発するように問いかけてきた。

アッシュの使役する二人の人狼が無言で前に出る。それを見た遊奈と利亜も、俺を守るように身構えた。

「さすがは私のご主人様ね。怒ってくれて嬉しいわ。戦うなら任せて。私ね、意外と強い

のよ？　隔離施設にもここみたいな運動場があって、そこで〝使い魔としての訓練〟は受けさせられていたから」

遊奈は自信と余裕に満ちた口調で俺に言う。

「あたしもあったま来た！　勝手なことばかり言って……マスターはすけべでえっちだけど、ヘンタイじゃないわよ！　たぶん！　あたしは姉様みたいに強くないけど……一発ぶん殴らないと気が済まないわ！」

利亜は肩をいからせてアッシュたちを睨みつけた。

けれど二人が戦意を見せたことで、俺の頭は逆に冷える。

――そうか。やるってことは遊奈と利亜を戦わせるってことだ。

一対一の魔術戦で負けるつもりはない。だがアッシュは使い魔を連れている。自分も使い魔を使わなければ、勝ち目は薄い。

しかしもう状況は後戻りできない段階に突入していた。

緊張が高まり、互いに仕掛けるタイミングを計っている状況。

だがその時、体育館に凛とした声が響き渡る。

「アッシュ・グレイワース！　昏部玖郎！　授業での訓練や演習以外で、他の候補生及び使い魔と戦うことは禁じられている。ポラリスから追放されたくなければ、諍いはそこま

でにしておけ！」
振り返ると体育館の奥に、昨日俺を案内してくれた女性――薙里導師の姿があった。どうやら別の入り口から入ってきたらしい。
「ちっ……」
アッシュは舌打ちをし、忌々しそうに俺を睨みながらも、体育館の奥へ歩き出す。
俺を排除しても、自分が罰を受けては割に合わないと考えたのだろう。
「べー、だ！」
利亜はアッシュの背中にあかんべーをしていた。
「ひゃー、ひやひやしたぜ。厄介そうな奴に目を付けられちまったな、玖郎」
そこで鳥彦が軽口を叩きながら近づいてくる。
「親友とか言ってたくせに他人事だな」
別に助けを期待していたわけではないが、少し皮肉を言っておいた。
「仕方ないだろ。朱門家はセプテントリオンでそれなりの立場があるから、ああいうガチの名門と揉めたら影響が大きいんだよ」
悪びれた様子もなく肩を竦める鳥彦。
キーンコーンカーンコーン。

そこに響くチャイムの音。
「――こんな変な場所にある獣魔導士の学校なのに、チャイムは普通なのね」
遊奈がどこか懐かしそうに呟く。
「これより式典を行う！　使い魔と共に学籍番号順で整列しろ！」
そこで薙里導師から招集がかかり、入学式が始まった。

続きは、7月20日発売のファンタジア文庫で！

©Tsukasa,Osanai 2019